

町はずれの空き地

小川未明

青空文庫

空^あき地^ちには、草^{くさ}がしげっていました。いまはもう黄色^{きいろ}くなって、ちやうど柔^{やわ}らかな敷^し物^{もの}のよう^{きもの}に地面^{じめん}に倒^{たお}れていました。霜^{しも}の降^ふつた朝^{あさ}は、かえつて日^ひが上^{のぼ}ると暖^{あた}かになるの^たで、この付^ふ近^{きん}に住^すむ子^こ供^{ども}たちは、ここへ集^{あつ}まつてきて、たこをあげるものもあれば、ボールを投^なげて遊^{あそ}ぶものもありました。

この空^あき地^ちの中^{ちゆう}央^{おう}に、一本^{ぼん}の高^{たか}い松^{まつ}の木^きがありました。独^{ひと}りぽつちで、いかにもその姿^{すがた}がさびしそうに見^みえることもあれば、また、さびしいということなど知^しらぬ聖^{せい}人^{じん}のよう^{みまも}に、いつもにこにことして、子^こ供^{ども}たちの遊^{あそ}んでいるのを見^み守^{まも}るよう^みに見^みえたことあります。

この町^{まち}の子^こ供^{ども}たちは、みんなこの木^きを知^しっていました。たとえ木^きのそばへ寄^よつて、ものをいいかけなくとも、お母^{かあ}さんが留^る守^すでさびしいときや、お父^{とう}さんにしかられて、悲^{かな}しかったときは、遠^{とお}くから、ぼんやりとこの木^きをながめて訴^うたえたものです。すると、木^きは、
「私^{わたし}のところへおいで。」と、手^て招^{まね}きするように、なぐさめてくれたものでした。

だから、もし、この広^{ひろ}場^ばに、工^{こう}場^{じょう}でもできるとか、また、道^{みち}が通^{とお}るとかいようなことがあつて、この木^きを切^きる話^{はなし}でも持^もち上^あがったなら、おそらく、この辺^{へん}の子^こ供^{ども}たちはど

んなに悲しむことかしれません。悲しむばかりでなく、

「あの木を切るの、かわいそうだ。」といって、大人たちに向かつて、同意を求め、この木を切ることに反対したであります。

その、多くの子供たちの中にも、立雄くんや、博くんは、いちばんこの高い松の木を愛している少年でした。他の子供たちが、いろいろのことをして遊んでいるのに、二人は、みんなから離れて、松の木の下にきて、枯れ草の上にすわって話をしていました。

「きれいな、空だなあ。」と、ふいに、大空を見上げて、博くんが、いいました。

「まだ、春にはなかなかなんだね。早く春がくるといいなあ。」と、立雄くんは、赤みを帯びた、松の木の幹をながめて、去年の春、遠足にいった田舎道を歩いたときの景色を思い出したのです。

「ごらんよ。あの白い雲は、ちょうど松の木の上にいるから。」と、博くんが、いいました。

「松の木と、雲と、話をしているのだね。」と、立雄くんが、答えました。

二人の少年は、松の木の頂と、さらにはるかに高く、遠い、青い空に浮かぶ、白雲を見上げて笑っていました。

「どんな話をしているのだろう？」

「きつと、雲さん、君は、どこへでも飛んでいけておもしろいだろうな、と、松の木がいつているのだよ。」と、立雄くんが、いいました。

「僕はね、松の木くん、君はいつも地の上で平和に暮らされてうらやましい。美しい鳥が止まったり、子供たちの遊ぶのを見たりして、愉快だろう。私は、風に吹かれてこうして、海の上や、野原の上を、毎日あてなく飛んでいると、雲がいつているのだと思うな。」と、博くんが、いいました。

そのうち、おひるの汽笛が鳴ったので、二人は、草の上から起き上がって、あちらへ歩いていきました。

近ごろになつて、この原っぱへきはじめた、コリントゲームのおじいさんが、今日も店を出して、まわりには、もうたくさん子供たちが集まっています。そして、赤い風船玉が、ふわふわと幾つも台に結びつけられて、キャラメルや、あめの棒などが、そばに置いてありました。

二人は、立って見ていました。

すると、このとき、あちらで、カチ、カチという、拍子木の音がしました。

「あつ、紙芝居がきた……。」

「黒い眼鏡のおじさんだよ。」

子供たちは、口々にそういつて、たちまち、おじいさんの、コリントの前からはなれ

て、あちらへ走つていきました。立雄くんも、博くんも、やはり同じであつたのです。

活動の弁士上がりであつた、紙芝居のおじさんは、説明がなかなか上手なので、子供たちには、たいそう好かれていました。

おじさんは、いつものように、子供たちを相手にして、お話をはじめていました。そこへ、だしぬけに、コリントのおじいさんが、やってきました。

「おい、ここで店を開くのはよしてもらおう。」と、おじいさんが、いいました。

黒い眼鏡をかけた、紙芝居のおじさんは、

「冗談じゃない。おじいさんこそ、ついこのごろここへやってきたのじゃないか？」

私は、もうずっと、ここへきているのだ。ここにいる坊ちゃんや、お嬢ちゃんたちに聞いてみてもわかるよ。ねえ、そうだろう……。それごろんよ。おじいさん、そんな無理をいつてはいけないぜ！」と、おじいさんは、いいました。立雄くんも、博くんも、どうなるだろうと見ていました。おじいさんは、一歩前へ寄つて、

「若いわかの、この土地とちは、私が生うまれたところだ。それがのう、この年としになるまで旅たびで暮くしたが、いいこともないので、帰かえつてきた。だれも私の顔かおを覚おぼえているものも、知しっている人ひともいないのだ。だが、この土地とちがなつかしくて、ここへくるわけなんだ。おまえさんは、話はなしもうまいし、顔かおも広いし、ここでなければならぬこともなからうが……。」と、おじいさんが、いいました。

「ああ、そうか、おまえさんは、ここで生うまれたのか？ それは、なつかしいだろう。わかつたよ。おじいさん、明日あしたから、私は、ほかでかせぐことにしようよ。」

紙芝居かみしばいのおじいさんは、みんなに向むかって、帽子ぼうしを脱ぬいであいさつをすると、あちらの町まちの方ほうへいつてしまいました。

二人ふたりの少年しょうねんは、なんとなくさびしい気持ちきもちがしました。そして、先刻さつき、松まつの木きの下したにすわって、空そらを見て、空想くうそうにふけたことが思おもい出だされたのであります。

「人間にんげんにも、あの松まつの木きのような人ひともあれば、また、雲くものような人ひともあるんだね。」と、博ひろしくんが、考かんがえながら、いいました。立雄たつおくんは、だまっていきましたが、しばらくして、「ねえ、博ひろしさん、おじいさんの子供こどもの時分じぶんから、あの松まつの木きは、あつたんだね。」と、立た雄おくんは、別べつのことを考かんがえていたとみえて、うしろを振ふり返かえって、空あき地ちの真まん中なかに立たつ

ている松^{まつ}の木^きをながめて、いったのでありました。

よく晴^はれた、空^{そら}の、あちら、こちらに、たこは上^あがっていました。しかし、白^{しろ}い雲^{くも}は、どこへいってしまったか、もう、見^みえなかつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

初出：「教育行童話研究」

1937（昭和12）年1月

※表題は底本では、「町《まち》はずれの空《あ》き地《ち》」となっています。

※初出時の表題は「町はづれの空地」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年5月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

町はずれの空き地

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>